

緑色の裸婦

アーウィン・ショー短篇集

小笠原豊樹訳



草思社

緑色の裸婦

アーウィン・ショー短篇集

小笠原豊樹訳



草思社

緑色の裸婦

1983 © Soshisha



訳者との申し合わせにより検印廃止

1983年7月12日 第1刷発行

著 者 アーウィン・ショー

訳 者 小笠原豊樹

装幀者 平野 甲 賀

発行者 加瀬 昌 男

印刷者 山 田 博

発行所 株式会社 草 思 社

〒 150 東京都渋谷区神宮前4の24の10

電 話 東京 03(470)6565 振替 東京 7-23552

印 刷 三陽社／製 本 大口製本

緑色の裸婦

アーウィン・ショー短篇集

小笠原豊樹訳



草思社

アーウィン・ショール短篇集

緑色の裸婦

緑色の裸婦

目次

二番抵当権 7

墓場の街 14

サマードレスの女たち 26

おれはデンプシーの最良だ 40

正義の勝利 50

保安官の助手 67

「いざ進め、フィールドへ」 80

躓きなき、自由な良心 87

埃まみれの辻説法 101

エルサレムのメダル 114

傷ついて彷徨う 142

アルジェの夜 169

機銃手の後送 175

復員兵は思う 200

ホーキンズ一等兵の受難 217

寡婦たちの再会 233

街の物音 253

緑色の裸婦 270

墓地の金鳳花 299

いやな話 331

分別盛り 347

忘却の川の麗らかな岸辺 362

その時ぼくらは三人だった 380

訳者あとがき 421

二番抵当権

呼鈴が鳴ったので、だれが来たのか見てみようと、ぼくは窓に近寄った。

「出るなよ」と父が奥から叫んだ。「呼出状かもしれない」

「日曜には呼出状なんか来ないよ」とぼくは言い、そうっとカーテンの合せ目をひらいた。

「とにかく出るな」父が居間に入って来た。父は集金人のあしらい方が下手なのだ。相手に強く出られると大まじめな顔で、口から出まかせに払う約束をしてしまい、結局払わないから、集金人は何度も無駄足を運び、猛烈にせっついてくる。一人で家にいるとき、父は呼鈴が鳴っても決して出ようとしない。だれが来たのかを確かめようとすらしない。けたたましい呼鈴の音が頭の上で鳴っているあいだ、台所で腰を下ろして新聞を読んでいるだけだ。一人のときは郵便配達にさえドアをあげない。

また呼鈴が鳴った。「なあんだ」とぼくは言った。「どっかの小さなお婆さんだ。なんかのセールスじゃないかな。あけてもいいいね」

「どうして」と父が問い返した。「どうせ何も買やしないのに」

ぼくは構わずドアをあけた。ドアが急にあくど、背の低いお婆さんはぎくりとしたように見えた。両手が小刻みに震えている。ぼっちゃりした小さな手は手袋をはめていないので赤く腫れている。

「わたし、ミセス・シャピロと申します」とお婆さんは言い、ぼくの出方を待った。

ぼくも相手の出方を待った。お婆さんは笑顔を作ろうとした。ぼくはにこりともせず待った。貧乏人の家では、見知らぬ訪問客が味方だったためしはない。ぼくはまだ十七歳だが、うちの呼鈴を鳴らす人はどうせ電気を止めに来たエディスン電力会社か、でなければガスを止めに来たブルックリン瓦斯会社か、そのたぐいの人間でしかないということは知っている。

ミセス・シャピロは形の崩れたコートの中の背中を丸めるようなしぐさをして、「わたし、二番抵当権を持っています」と言った。

それでもぼくは仏頂面で話の続きを待った。こいつもやっぱり敵なんだ。

冷たそうな赤く腫れた片手が、訴えるように差し出された。「あの、お父様とお話できないかしら」父はとくに台所へ退散し、サンデー・タイムズを読みふけていた。きつと、戸口では何事も起りませんように、この平和な新聞記事の世界から引き離されませんように、とでも祈っているのだろう。

「父さん！」とぼくは呼んだ。父の溜息と、サンデー・タイムズのがさごそいう音が聞えた。読みさしの社説を伏せて立ちあがったのだ。ミセス・シャピロが居間に入り、ぼくはドアをしめた。父が台所に後髪引かれるような恰好で、眼鏡を拭きながら入って来た。

「父さん、こちらはミセス・シャピロ」とぼくは言った。「二番抵当権を持ってるんだって」

「そうなんです」ミセス・シャピロは俄かに積極的で朗らかな感じになり、ちょっと申しわけなさそうな顔をして部屋の中央まで入ってきた。太くて短い脚のストッキングは伝線しているし、靴はひどくくたびれている。「実を申しますと……」

「はあ、はあ」と、父は集金人と話するときの板につかない事務的な口調で言った。相手に強く出られ

ると、この口調は途端に消えてしまふのだが。「はあ。なるほど。少々お待ち下さい……その件については家内が……家内のほうが詳しいので……ええっと……ヘレン！ヘレン！」

母が髪を撫でつけながら二階から下りて来た。

「こちらはミセス・シャピロ」と父が言った。「なんでも二番抵当権を……」

「わけをお話しますと」と、母に近寄りながら、ミセス・シャピロが言った。「実は一九二九年にわたしは……」

「まあお掛けになりません」母は椅子をゆびさし、唇を固く結んで、ちらと父を見た。ぼくらの貧乏暮らしの代表者のような連中を、父はどうしてもうまく撃退できないのだが、そのたびに母は父のことをひどく齒がゆがるのだ。

ミセス・シャピロは椅子に浅く腰掛け、両膝をぴったり合せて、上体を乗り出した。「この二番抵当権は八百ドルなんです」とミセス・シャピロは言った。ぼくら三人はなんにも言わずに坐っていた。この沈黙にミセス・シャピロは拍子抜けしたようだったが、それでも喋りつづけ、ことばにつれて灰色のたばたばした頬の肉がさかんに揺れた。「八百ドルと言えば大金ですわ」

ぼくらはあえて反対はしなかった。

「一九二九年にわたしは八千ドル持ってきました」とミセス・シャピロは言い、同情か、妬みか、なんらかの反応を期待してぼくらの顔を見た。ぼくらは大金を持ちつけている人間のような顔をして、無表情に坐っていた。「八千ドルです。一生かかって稼ぎ出したお金です。うちは八百屋をやっておりましてね。今どき野菜でお金を儲けるのは容易なことじゃありません。野菜は高いし、すぐ傷むし、よその店じゃすぐ安売りをするし……」

「そうですね」と母が言った。「お野菜はほんとに高いわ。きのうなんか、カリフラワー一個が二十

セントもして……」

「それも無駄な買物だった」と父が言った。「私はカリフラワーが嫌いなんです。どうもキャベツを連想しちまつて」

「主人は癌で亡くなるまで二年間寝たきりでした」と、ぼくらの機嫌をとるような口調でミセス・シャピロは話をつづけた。「頼みの綱は八千ドルの貯金です。わたしはリニューマチと高血圧で、もう八百屋の仕事はできませんでしたし」ほんの少しの同情でも見あたらないかというように、ミセス・シャピロはまたぼくらの表情をうかがった。「銀行から八千ドルおろしてきて、メイヤーさんをお願いしたんです。『メイヤーさん、あなたは信用のおける立派な方だという評判ですから、連れ合いに先立たれた女のありつたけの貯金をお預けします。これを投資して、わたしの生活費が出るようにして下さいませんか。たくさんは要らないんです、メイヤーさん』わたしそう言いました。『生きてるあいだ週に何ドルかずつでいいんです』わたしそう言いました。『毎週何ドルかずつ』って」

「そのメイヤーという人は」と父が言った。「最近では左前らしいね。あの信託会社は倒産して、今、更生手続中だ」

「メイヤーさんはべてん師です！」とミセス・シャピロは熱をこめて言った。両の拳が小さな腿の上で震えた。「あの人に預けたお金は二番抵当権に化けてしまいました。八千ドル分の二番抵当権です！」

ことばがとぎれた。瞬間、ミセス・シャピロはもう話をつづける気力もないように見えた。

「この頃じゃ」と父が言った。「一番抵当権でさえ何の価値もないからな。価値のあるものなんか、もうなんにもありゃしない」

「この二年間」と、目に涙を浮べてミセス・シャピロは言った。「一文も受け取っていません……八

千ドルの二番抵当権は一文にもならなかった……」ぼろぼろの小さなハンカチが現れて、お婆さんの目を拭った。「メイヤーさんには何度も掛け合いに行きましたけれど、いつも、もう少し待ってくれの一点張りです。待てといわれても、いつまで待てるでしょう。今だって、もう食べるものもないんです！ これ以上待てますか」勝ち誇ったように涙が流れた。「この頃じゃメイヤーさんは逢ってもくれません。訪ねて行くたびに外出中だなんて。もう行っても無駄だわ」ミセス・シャピロは涙を拭きながらことばを切った。ぼくらはひどく氣詰りで、なんにも言わずに坐っていた。

「わたしが二番抵当権を持っている家を一軒一軒まわってみます」とミセス・シャピロは言った。「どちらも、いいおうちばかり……お宅さまそっくりです。絨毯にカーテン、そして暖房がきいていて、お台所からは何かのお料理の匂いがして。そんな家の二番抵当権を何軒分も持っているわたしのに、食べものもろくに食べられず……」涙がぼろぼろのハンカチを通して滲み出た。「お願いします」とミセス・シャピロは叫んだ。「お願いします……何かください。八百ドルなんか要りません、いくらかでもいいんです。もともとわたしのお金でしょう……ほかにお願いする所がないんです。わたしはリユーマチだのに、部屋には暖房もないし、靴は穴だらけなんです。はだし同然で……お願いします……お願いします……」

ぼくらは押しとどめようとしたが、ミセス・シャピロは泣きながら繰返した。「お願いします……お願いします……いくらかでもいいんです。百ドル。いえ、五十ドルでも構いません。もともとわたしのお金でしょう……」

「分りました、ミセス・シャピロ」と父が言った。「今度の日曜に来て下さい。それまでになんとか都合しましょう……」

泣き声がやんだ。「ああ、ありがたいことです」とミセス・シャピロは言い、あつというまに椅子

から跳び下りて、父の前に這いつくばると、猛烈な勢いで父の片手に何度も何度もキスし、「ありがたいことです、ありがたいことです」と繰返した。父は迷惑そうな顔をして、空いたほうの手で老婆さんを立たせようとしながら、なんとかしてくれと言わんばかりに母の顔を見た。

とうとう母の堪忍袋の緒が切れた。「ミセス・シャピロ」と、母は（ありがたいことです）の連呼に割って入った。「ちょっと聴いて下さい！ もうたくさんですよ！ やめて下さい！ あなたにあげるお金なんかないんです！ 今度の日曜だろうと、いつの日曜だろうと、一セントだってありません！」

ミセス・シャピロは父の手を放した。ばくらの居間のまんなかで、父の前に跪いたままのその姿は恐ろしく異様に見えた。「でも、ロスさんはたった今……」

「主人は出まかせを言ってるんです！」と母は言った。「今うちにはお金なんかないし、これから入るあてもありません！ 私たちだって、いつなんどきこの家から追い出されるか知れたもんじゃない！ あなたにあげるお金なんか全然ないんですよ、ミセス・シャピロ」

「でも、今度の日曜に……」今すぐではなく一週間先に貰えばいいのだ、とでもミセス・シャピロは母に説明したかったのだろうか。

「今度の日曜どころか、今日あすのくらしもおぼつかないんです。今この家には八十五セントしきやないのよ、ミセス・シャピロ！」母は立ちあがり、床に跪いているミセス・シャピロの方へ歩み寄った。母が助け起そうと手をのばした瞬間、ぎゅう詰めの鞆が落っこちたときのような重い音を立てて、ミセス・シャピロは床にひっくりかえった。

意識が戻るまでには十分もなかった。母が差し出したお茶を、老婆さんは無言で飲んだ。お茶を飲み干し、帰り支度をするあいだ、ばくらを見ても、もうだれなのか分らないような目つきだった。そ

して、こんなふうに氣絶したのはこの二ヵ月間でもう五度目だと言い、そんな自分を恥じている氣持だけはありありと見えた。診療費の取り立てが厳しくない病院の所番地を母に教わったあと、みすばらしいストッキングをはいた太い脚をがくがくさせながら、ミセス・シャピロは玄関の段々を下りて行つた。足をひきずって歩くその姿が通りの角をまがって消えるのを、母とぼくは眺めていたが、父はさつさと台所へ戻って、ニューヨーク・タイムズを読みふけた。

次の日曜に、そしてそのあとも日曜ごとに二度ほど、お婆さんはやって来て呼鈴を鳴らしたが、ぼくらはドアをあけなかった。来るたびに三十分近く呼鈴を鳴らしつづけたけれども、ぼくら三人は台所で息を殺して、お婆さんが立ち去るのを待った。

墓場の街

夕食前のひととき、ブラウンズヴィル(ニューヨーク市ブロンクス区)ではタクシーの運転手たちがラマナウィッツのバー兼グリルに集まって、ビールを飲みながら世間話をしたり、高架線の向う、プロスペクト公園(ブルックリン区の中央や西寄りにある大きな公園。美術館や植物園がある)の方角にゆっくりと沈んでゆく夕陽を眺めたりする。

「マンゴー(ヴァン・リッングル・マンゴー、一九一一年生、三〇年)？」と誰かが言う。「マンゴー？ 奴の投球力の秘密は魚だ。鯖さばを食うんだとさ。奴のピッチングで、ブルックリンは今にインターナショナル・リーグの最優秀チームになるんじゃないかな」

「今日、市長を見たよ。ああ、市長さん本人をね。リトル・フラワー(一九三四年から四五年までニューヨーク市市政刷新を旗印として人気があった。イタリア名フイオレ。長だったフイオレロ・ラガーディアのこと。ロリ「小さな花」から「リトル・フラワー」と呼ばれた)。今のアメリカに必要なのは……」

「ピンキー、ビール一杯、ついで飲ましてくんねえかな」

だだっぴろいくすんだカウンターの濡れた所を拭いてから、ピンキーは神経質そうに言った。「だからさ、イライアス。ニューヨーク州の法律なんだってば。アルコール性飲料の貸し売りは禁じられてるんだ」

「たったビール一杯だぜ。アルコール性飲料が聞いて呆れらあ！」イライアスの唇がゆがんだ。「お